

全国初の眼科総合施設

2017年12月、本市が推進する「神戸医療産業都市」の新たな中核施設として、神戸アイセンターがオープンした。同センターは、

的研究者である、理化学研究所の高橋政代プロジェクトリーダーの「目の見えにくい方にユートピアを！」という想いを起点にスタートした。市の総合調整のもと、市立病院、理化学研究所、公益法人、

ながら、段差があり手すりがない「バリアフリー」空間となっている。現実はまだまだバリアフリーではない。目を閉じてでも登れる段差や、手すりとして利用できる造作家具を配置し、安全を確保しつつ、この空間体験をきっかけに、目の見えにくい方の行動変容を促すことを企図している。

開設が遅れる!?

このビジョンパークを巡り、工程の大幅遅延という一大事が起こった。現実を模した「バリアフリー」空間を目指していたはずが、関係者の中で「パブリックスペース」という意識が働いてしまったのである。手すりの設置や段差の解消などが進められていた。

開設まで5か月余の6月の暑い夜、高橋プロジェクトリーダーの呼びかけのもと、行政、病院、施工会社等の関係者20人以上が一堂に会した。協議の結果、当初のコンセプトに立ち返り、計画を軌道修正することが確認された。

しかし、数日後に施工会社からあがってきた工程表は、開設が1か月程度遅延するというものだった。神戸医療産業都市の象徴とな

る施設がスタートから躓くわけにはいかない。施工会社、関係機関とぎりぎりの調整を重ね、何とか予定日に間に合う工程を組み直した。1日の遅れも許されない中、天気も味方し順調に工事は進捗。無事、開設の日を迎えることができた。

強力な原点が困難を打破する

このプロジェクトを通し、多くの機関が参画する事業の難しさを痛感した。意思疎通、情報共有の重要性は誰もが理解している。それでもすれ違いは起こる。その際、大事なことは、関係者間で立ち返れる強力な原点（PDCAのP）を共有しておくことにある。何とか予定通りにオープンできたのは、「目の見えにくい方にユートピアを！」という原点を関係者全員が胸に宿していたからだと思う。

開設から1年半。神戸アイセンターは、すべての都道府県から患者が訪れるなど想像以上の反響を呼んでいる。神戸アイセンターという組織体は存在しない。しかし、産官学医の協働により、「医療」×「研究」×「福祉」という新たな価値を提示し続けている。



本連載は「自治体改善マネジメント研究会」のメンバーが執筆しています。同研究会は自治体で改善運動を推進してきた職員と行政経営デザイナー元吉由紀子が共同で設立。実践事例情報を収集、分析し、ナレッジ化して情報発信している。2017年にNPO法人化。ホームページ、Facebook「自治体改善の輪」を運営。

第17回

原点共有で危機を乗り越えた神戸アイセンターの開設

眼科領域において、基礎研究から臨床応用、治療、ロービジョンケア（弱視者支援）まで一貫通貫に対応する全国初の施設である。このプロジェクトは、iPS細胞を活用した網膜再生医療の世界

株式会社等、複数の機関が協働で運営している。同センターの大きな特徴がリハビリ、就業支援等を行う通称「ビジョンプーク」だ。病院の受付も兼ねたパブリックスペースであり